奥浄瑠璃『田村三代記』の古層

福田　晃

はじめに

奥浄瑠璃は、江戸初期から仙台藩を中心に、一部南部藩領において、ボサマと称された盲人たちが語ったもので、江戸や上方では、これを仙台浄瑠璃ともいい、また仙台藩内では御国浄瑠璃とも呼ばれていた。その盛行は、江戸期の半ばから末に及んでのことであったが、近代に至ってはやはり衰退の道を辿っている。が、それでもその活動は、明治期にはいまだ活発で、中央の学者の求めに応じて、語り手たちのなかには、上京してその語りを披露することもあり、[1]昭和の初年には、その語りの一部がレコードに収録されて世に紹介されることもあった。[2]そして戦後に至っても、数名の方々の活動が知られていたが、[3]昭和五十四年、最後の語り手ともいうべき一関の北峯一之進師を失って、[4]奥浄瑠璃の伝承は、全く絶え果てたということになる。したがって、今日、奥浄瑠璃の伝承実態を考察することはきわめて困難な状況になったと言わねばならぬ。

一方、近代の奥浄瑠璃の伝本収集は、明治末年の大槻文彦氏に始まると言えようが、[5]その影響のもと、斎藤報恩会学芸員の小倉博氏によって精力的に進められ、昭和七年には『御国浄瑠璃四篇』[6]、昭和十四年には『御国浄瑠璃集』[7]が公刊されている。その前者は、小倉氏が収集されたおよそ三十七種の伝本から四本を選んで収載されたものであり、後者は、さらに三十七種を加えて七十四種のなかから十八種十九本の伝本を収載しており、ほかに二十九種三十六本については外題名のみをあげている。しかして戦後には、高橋秀雄氏[8]、本田安次氏[9]、伊藤博夫氏[10]、金沢規夫氏[11]、阿部幹夫氏[12]、坂口弘之氏[13]、その他の報告[14]も続き、奥浄瑠璃の伝本も、ようやく大系的に把握できることとなった。そして、その伝本の総括的整理は、はやく若月保治氏が、小倉博氏収集の伝本を中心に、七十四種のそれをもって試み、昭和十九年に『古浄瑠璃の研究』第四巻において公表されている。[15]

また、浅野建二氏が小倉博氏の収集された一一〇の伝本を斎藤報恩会博物館並びに小倉巌氏所蔵の写本及び口授筆記本類を精査して、昭和三十九年に『国語と国文学』誌上に、それを報告されている。[16] あるいは、近年精力的に伝本の収集に携わっておられる阿部幹夫氏も、平成二年の『芸能』誌上で、その分類案を提示されているが、[17] わたくしも同年に開催された軍記物研究会・仙台大会、[18] および巫覡盲僧学会大会[19]において、分類私案を提言している。[20] なおわたくしのかかわる奥浄瑠璃研究会も、昭和五十二年以来、伝本の収集につとめ、平成十二年には『奥浄瑠璃集成』(一)[21]に、「奥浄瑠璃諸本目録」を公表して、八十五種二七八本の伝本を確認している。

一、『田村三代記』の叙述

さて、右の奥浄瑠璃のなかで『田村三代記』は、ボサマの代表的演目として伝承されてきたものである。ちなみに、菅江真澄の『かすむこまかた』にも、当地方における「盲瞽法師(メシヒノホウシ)」の中心的題目としてあげられており、[22] 明治の語り手たちも、これを得意とするところであった。[23] また、かの北峯一之進師も、晩年に語られた三曲のなかに「田村三代記」を含み、その詞章を自ら書き留めている。[24] したがって、その伝本も比較的多く見つけ出されており、わたくしどもの「諸本目録」では十八本を数えることができる。その諸本の詳細については、奥浄瑠璃研究会の小林幸夫氏が検討を進めているが、[25] その中間報告によれば、それはおよそ次のごとく系統分けされるという。

第一種〈田村二代の事績を語る伝本〉

①田村三代記(八段)　鈴木幸龍口授(『御国浄瑠璃集』)
②田村三代記(五段)　長田幸吉旧蔵(『御国浄瑠璃四篇』)
③田村三代記(二段)　北峰一之進筆録(『民俗芸能』三五号)
④二代田村(五段)　吉田久四郎蔵(『南部叢書』)
⑤二代田村御本地之事　藤平家蔵(明治十七年写本・阿部幹夫氏紹介)[26]

第二種〈田村三代の事績を語る伝本〉

①田村三代記(五段)　旧蔵不詳(安政七年写本『御国浄瑠璃集』)
②田村三代記(五段)　佐藤篤治旧蔵・斎藤報恩会蔵
③田村三代記(六巻)　常盤雄五郎旧蔵(『仙台叢書』)
④田村三代記(六巻)　旧蔵不詳・宮城県立図書館蔵
⑤田村三代記(七段)　旧蔵不詳・真下厚氏蔵(文化十年写本)
⑥田村三代記(六段)　佐藤与四郎旧蔵(安政六年写本・小倉ノート)
⑦三代田村(九段)　吉田久四郎旧蔵(『南部叢書』)
⑧箆嶽本地(六段)　石田熊吉旧蔵・斎藤報恩会蔵(明治十五年写本)
⑨奥州箆嶽本地(六段)　旧蔵不詳・斎藤報恩会蔵

第三種〈田村二代と田村三代とを連続して語る伝本〉

①田村三代記(上巻八段・下巻八段)　青野勇治旧蔵・斎藤報恩会蔵(文政三

年写本）

②田村三代記（上巻八段 下巻五段）　遠藤栄治旧蔵・斎藤報恩会蔵

③田村三代記（上六巻 下六巻）　高橋忠蔵旧蔵（小倉ノート）

④田村三代記（六段）　後藤長作旧蔵（小倉ノート）

およそ『田村三代記』は、かの田村麿の鬼王退治という英雄的事績を三代にわたって語るものであるが、その第一種本は、初代・利春の異常な生涯を前段にあげ、二代・利光の英雄的事績を異常な誕生・遍歴・婚姻などを通して叙するものであり、第二種本は、三代・利仁の英雄的事績を妖女・立烏帽子との異常婚姻を通して叙するものである。そして第三種本は、利春から利光の二代にわたる英雄物語なる第一種本と三代の利仁の英雄譚なる第二種本とを連続して叙するものである。また右の諸伝本は、多くが江戸末期から明治初年の書写に及ぶものであり、およそ奥浄瑠璃の盛行の最終的段階に応ずるものと推される。またそれは、旧仙台領を中心に、一部南部領において書写されており、これもほぼ奥浄瑠璃の伝承圏と重なるものと思われる。

さてここで奥浄瑠璃『田村三代記』の梗概を紹介するが、今は便宜的に小倉博氏の『御国浄瑠璃集』により第一部の【前・田村物語】に当る第一種本と第二部の【後・田村物語】に当る第二種本を続けてあげることとする。なお通し番号は、次章にあげる『田村の草子』との対応の都合上、やや順序不同のまま掲げている。

第一部【前・田村物語】

〈発端(一)〉父の異類婚姻

①平城帝の御代、丹波・播磨の境に大星が天降り、その中から三歳ばかりの童子が現れる。丹波の管領の橘右衛門が、この童子を拾い上げ内裏に差し出す。帝は、この子を星丸と名づけて、乳母をつけて養育させる。〔星の子誕生〕

②星丸は、七歳にして習わぬ書を読み、横笛を吹けば、天女が天降るほどの笛の上手となる。また、十歳にして身の丈四尺八寸六分となり、官職を賜わって、二条の中将利春と称する。〔笛吹童子〕

③十五歳の折、笛の上手の由を聞かれた帝は、利春を召して、天人の舞楽を命ずる。が、利春は、梵天王の庭ならでは叶わずとことわる。帝は逆鱗に及んで、利春を越前の三国が浦に流す。〔越前配流〕

④利春は、配流の憂いを慰めるために、横笛を吹くとき、繁井が池の大蛇が、その音に誘われて、美女と変じて聴聞に通う。利春が見とがめると、このあたりの長者の水仕しからみと名告る。その容顔の美しさに、蛇体とは知らず、利春は契りを込めると、やがて御子をみごもる。〔蛇女房婚姻〕

〈発端(二)〉異常誕生・成長

⑤女は、一年たっても二年たっても産がない。利春が怪しむと、実は自分は天竺の生まれで、その習いによって、三年三月で産の紐を解くので、繁井が池の辺りに、七間四面の産屋を作っ

て欲しいと言う。それを用意すると、女は、百日のうちには入るべからずと言って産屋に入る。九十九日の夜、利春が怪しんで産屋をのぞくと、恐ろしい大蛇が眉目に出生の子を差し上げている。〔蛇息子誕生〕

⑥明けると、女は出生の男子を抱いて利春の前に現れるので、利春は知らぬ躰にて、養育を頼むともてなす。しかし、利春の留守を見はからって、女は出生の若子を抱き、母はまことの人間ならず、繁井が池の大蛇なり、その本体を現わされたれば古巣へ帰るぞとくどいて、若子を残して去る。〔蛇女房別離〕

⑦利春は、産子の枕元に残された鏑矢一筋を乳房がわりとして若子を育てる。名は大蛇丸と称し、三年も経過するとき、利春は赦免され、大蛇丸ともども都に戻り、二条に屋形を構えて、北の方を迎えてめでたく暮らす。〔蛇息子成長〕

⑧大蛇丸が十歳になるとき、大和・山城、加茂川と桂川の間の今瀬が淵に住む悪龍退治の宣旨をたまわる。大蛇丸は、母の護りの神通の鏑矢と帝からの名剣素早丸を手にして当地に赴き、これの首を打ち取る。帝の叡感あって、中納言に任ぜられ、二条の中納言利光と名告る。が、あるとき、紫雲のなかから声があって、今瀬が淵の悪龍は汝の母なりという。〔悪龍退治〕

〈展開(一)〉奥州征討・異常婚姻

⑩二十余年が経過して、嵯峨帝の御代に、奥州に夷がおこって毒矢を放ち、地頭は互いに境を争って宸襟を悩まし奉る。公卿評議して、利光に奥州大将軍の宣旨が下さる。〔奥州派遣〕

⑫利光は、素早丸の太刀をはき、漣という名馬にまたがり、一千余騎の軍勢を率いて奥州利府の郷に向かう。奥州の諸大名は、この度の大将軍、大蛇の腹に生まれし人なれば疎かにすべからずとて、われもわれもと行き従い、そのご威勢に夷も恐れて降参する。帰国に先だって、利光は、盛大に御狩を催して、長け八尺の異形の狒々、一丈に余る荒熊などを打ち取らせる。〔蝦夷鎮圧〕

⑪九門屋長者の水仕に、悪玉と称される悪女が、山下に出て水菜を摘む折、たまたま通りかかった利光がこれを認め、そのまま駕籠にて陣に迎え契りを込める。別れに当って利光は、形見の品とて、母の大蛇からの鏑矢を留める。〔醜女婚姻〕

〈展開(二)〉異常誕生・父子の邂逅

⑬悪玉は、鏑矢の威徳に懐胎するが、十月になっても生まれず、二年、三年たっても出産のけしきはない。九門屋の長者は恐れをなして、悪玉を裏門から追い出す。悪玉は、山中に迷い込み、三年三月に産気を催す。折から柴刈の人々が、これを見て、産屋をしつらえてくれる。やがて、十一面観音・熊野権現を祈念するうちに男子が誕生する。これを知った九門屋から使者が来たって、生まれ子を捨てて帰れと言う。悪玉は子を抱いて死のうとするが、塩釜明神が示現して引きとどめる。子を抱いて九門屋へ戻ると、美しい男の子を見て、長者夫妻は、自らの世嗣として育てるとて、悪玉に親子の名

のりをしないことを熊野権現にかけて誓わせる。そこで、その子の名を熊の一字をかたどり、千熊丸と名づけて養育する。

〔父なし子誕生〕

⑭千熊丸が七歳になると、山寺に登って学問につとめるが、そのひまに北辰山に入って剣術を学び、身の丈五尺八寸となって、十二歳には山寺を降りる。弘仁二年八月十五日、八幡宮の流鏑馬に、千熊が弓太郎を望むと、別当坊は、下衆の悪玉の子どもに与えぬとて恥辱を与える。千熊が、悪玉の庵を訪ねると、たまたま悪玉は、千熊をしのんで口説を立てて歎いている。はじめて千熊は、実の母が悪玉なることを知り、悪玉に実父を問う。悪玉はやむなく、これまでの経緯を述べ、陸奥兵乱の折の将軍が父なることを教え、父との再会のため上洛しようとする千熊に形見の鏑矢を渡す。

〔母の告知〕

⑮千熊は、まず塩釜大明神に参詣し、奥州街道から東海道の宿々を過ぎて、やがて都にたどり着く。とある所に宿をとって、三条の利光の屋形を訪ねて門前にたたずむと、たまたま利光は蹴鞠に興じており、その鞠が千熊の前に落ちる。千熊が蹴返すと、それが利仁の前に落ちる。その志を問えば、当主への奉公を言うので、力試しに二人がかりの碁盤を出すと、子どもでも持てると広言する。家臣の源太が乗ると、そのまま碁盤を持ち上げ源太ともども投げ飛ばす。利光、その芸に感じて、望み通り奉公を許す。

〔父子邂逅〕

⑯利光将軍、恐しき者とて、千熊を謀り討たんと、丹波の悪馬なる鬼鹿毛を乗り鎮めよと命ずる。白骨の山なる厩にて、我に従わば馬頭観音を崇めんと言えば、鬼鹿毛、涙を浮かべて千熊を乗せる。千熊は、鬼鹿毛にてみごとな馬術を披露する。利光、いよいよ生かしておけぬとて、千熊に食事を進め置いて、自ら弓矢を取って障子の陰から千熊を打つと、千熊ははっと身を捻じ、箸にて矢を受け止める。利光、二の矢を射れば、はっと身を捻じて矢中をおさえる。利光降参して、千熊に本名を問えば、形見の鏑矢を出し、悪玉の腹に宿りし千熊と申し上げる。

〔父子確認〕

〈結末〉一門栄華・神明祭祀

⑰利光は、千熊を伴って参内すれば、千熊に坂上田村麿利仁の名が与えられる。また、悪玉を本妻とすべしとて四位の女官に補せられ、田村御前と称される。御前は、千熊を養育した九門屋夫妻、産屋をしつらえた柴刈の山人らに恩賞を送って上洛すれば、村人は悪玉御前を染殿大明神と崇め祀る。

〔栄花示現〕

第二部【後・田村物語】

〈展開(一)〉鈴鹿征討・異類婚姻

⑳奥州箆嶽達谷が窟の毘沙門天建立の由来を言えば、それは仁明帝の御時、光物が昼夜わかたず飛んで諸人を悩ませることによる。陰陽の博士の占いで、それは立烏帽子という魔王の娘が鈴鹿山にあればということになり、これを討つべしとの宣旨が利仁に下る。二万余騎を率いて鈴鹿山に入り、一年間、

それを探し求めても、その姿を見出せない。利仁は、ひとり留まって三年、山中の小笹原の奥に極楽世界を思わせる四季の屋形があり、そのなかに、十二単衣の美しい女房なる立烏帽子を見る。利仁は、この女房に心引かれるが思い直して、重代の素早丸を女房に投げかけると、女房は少しも驚かず、大通連を投げかけ、二つの劔が相戦う。素早丸が鳥と化して女房を追えば、大通連は風となる。火焔となれば水となる。

〔立烏帽子征討〕

㉑その時に、女房は、利仁の先祖を委しく語り、利仁の心を言い当て、自らも悪心をひるがえして、利仁に馴れ染め、悪魔を共に鎮めたいと語る。利仁は、是非なしとて立烏帽子と馴れ親しみ、比翼の語らいをなす。利仁、鈴鹿山に三年六月暮らせば、二人の間には、正林という三歳の姫君をもうける。

〔立烏帽子婚姻〕

㉒ある時、利仁は、雁に託して内裏に文を届ける。それには、来たる八月十五日に、魔女を連れて参内すれば、搦取れとあるので、内裏には、二万余騎の軍勢を集めて、これを待つ。これを知って立烏帽子は、利仁に恨みごとを述べるが、利仁はあえて八月十五日、ともに光輪車に乗って内裏に赴く。立烏帽子は、その美しい姿を帝に見せ、利仁には、明石の高丸退治の宣旨あれば、自らもお伴すべしと伝えて去る。

〔立烏帽子の内約〕

〈展開(二)〉奥州の悪王征討

㉓立烏帽子の予告通り、利仁は、近江蒲生ガ原の明石の高丸を討つべき宣旨を蒙る。蒲生ガ原から常陸鹿島浦まで追いつめるが、高丸は日本と唐との潮境、筑羅ガ沖に閉じ籠る。

〔高丸征討〕

㉔利仁が軍勢を整えるため都に退く途次、伊勢の山田に宿を取ってまどろむ時、立烏帽子が寝所に現れ、高丸退治の援助を約す。利仁と立烏帽子の二人ばかり光輪車に乗れば、三日で高丸親子の籠る筑羅が沖に着く。立烏帽子は扇をもって天から十二の星を招き、星の舞を舞う。その時、高丸の娘に、八十四歳のきわたという者があり、窟の戸を少し開けて星の舞を見る。高丸も、そこから目を出せば、利仁、神通の鏑矢を射る。その矢は、あやまたず高丸の右の目を射抜く。続いて二人は、四つの劔でもって、高丸親子らすべての首を打ち取る。高丸の死骸は肥前の国に送り、塚を築いて鎮める。これが、肥前一の宮となる。〔高丸退治・立烏帽子の援助〕

㉕立烏帽子は、奥州達谷が窟の大嶽丸をたぶらかすためにあえて捕われるが、いずれ名馬に召されてお下りあり、大嶽丸を打ち給えと言って別れる。利仁が帰洛して三年過ぎるとき、達谷が窟の大嶽丸退治の宣旨が下る。利仁は、東海道の奥羽街道にそって下り、国分薬師・龍門の山寺を詣でて達谷が窟に着くと、立烏帽子が迎え、五百人の眷属はすでに神通にて捕縛していることを告げる。やがて大嶽丸が現じるが、利仁と女房と四つの劔でこれを打つと、大嶽丸は霧山天上から飛

嶽山麒麟が窟に隠れるが、利仁は観音の力を得て、大嶽丸を打つと、その体は四つに切られ、首は出羽と奥羽の境の鬼首まで飛ぶ。

〔大嶽丸退治・立烏帽子の援助〕

〈展開(三)〉夫妻の二世再会

㉖利仁と立烏帽子とは、光輪車にて鈴鹿山に戻り、利仁が上洛しようとすると、立烏帽子は、定業の来たることを告げる。これを聞いて利仁は、鈴鹿に留まろうとするが、立烏帽子は利仁を励まして上洛させる。利仁が、帝に大嶽丸退治を報告すると、大嶽丸退治の地の祭祀を命じられる。霧山が天上に寺を立て、達谷が窟に毘沙門天、箆嶽山に千手観音を祀って、再び上洛の後、鈴鹿山に赴けば、立烏帽子はみまかって三年になるという。しかし、その寝所には、色も変わらぬ立烏帽子が臥しており、寄り添う利仁に、自らの宝劔を日本に残す由を述べ、正林を頼むと言い残して後に姿を変じる。

〔立烏帽子の横死〕

㉗利仁は、夢ともなく現つともなく、立烏帽子の手を取って、関所めいた所に至ると、女は定業なれば火中地獄へ、男は死せざる者なれば、娑婆へ帰れと言われる。利仁は、夫婦は二世なるを説く。

〔冥界訪問〕

㉘冥途の大将が、利仁は悪魔退治の観音の再来にて、いまだ日本が必要なれば帰れと説くが、利仁はあくまでも立烏帽子と行動を共にすることを主張する。大将は、やむなく立烏帽子を同じ年齢で三日前に亡くなった志賀の金岡八郎の娘小松の体に入れ替えて蘇生させる。が、その小松が蘇生したと思うと、利仁の夢はさめ、立烏帽子の御殿は消えて、鈴鹿の山中に正林を抱いて臥している。

〔蘇生・再会〕

〈結末〉一族栄華・神明祭祀

㉙利仁は、正林を伴い、都に帰り、蘇生した金岡八郎の娘小松の前を妻に迎える。利仁は往生の後、鈴鹿山の田村大明神、小松の前は同じく清滝権現と現じなさる。正林の姫君は南部岩手郡正林寺の地蔵菩薩と現れなさる。

〔繁栄・示現〕

右のごとく『田村三代記』は、田村麿の蝦夷征討の史伝にもとづきながら、三代にわたる奇々怪々なる事蹟を語るものである。そしてそれは、次章にあげるごとく、先行の語り物・物語草子によりながら、当代の在地の享受者にこたえる浄瑠璃に仕立て直したものと推されるのである。

二、『田村の草子』の叙述と構造

右の奥浄瑠璃『田村三代記』は、おそらくは先行の古浄瑠璃に拠って成ったものと推されるが、その正本はいまだ見出されていない。[27] したがって、今は、その古浄瑠璃とのかかわりが推される室町時代の物語『田村の草子』をもって、奥浄瑠璃『田村三代記』の素材として論を進めることとする。

さて、その『田村の草子』は、別名『鈴鹿の草子』と称され、そのテキストは、松本隆信氏によれば七種に分別されているが、

本稿では、現存最古写本と判ぜられる慶応義塾図書館蔵古写本「すすかのさうし」（『室町時代物語大成』第七）に拠り、必要に応じて、同図書館蔵万治三年写本「鈴鹿之物語之双紙」（『神道物語集』）、天理図書館蔵写本「すすかの物かたり」（『室町時代物語大成』第七）、大東急図書館蔵奈良絵本「すすか」（『室町時代物語集』第一）、寛永刊古活字版「田村の草子」（『室町時代物語大成』第九）などを撿することとする。が、その叙述内容は、およそ次のようである（なお括弧内は「すすかのさうし」にはなく、他のテキストで補ったものである）。

第一部【前・田村物語】

〈発端(一)〉父の異類婚姻

(3)（俊重将軍の御子に、俊祐と申す方が、越前池之郡に住んでおられたが、十六歳から五十一歳まで数多くの女房を送り迎えても一人の子もない。そこでよき婦妻を求めて都に上り、五条のあたりに住まわれる。）〔妻覓ぎの上洛〕

(4)たまたま、九月の中旬、俊祐が南面（嵯峨野）に出て、四面の景色を眺めるとき、美しい女房が現れて歌を交わす。俊祐は、この女房を見そめて邸内に迎え、契りを重ねると、やがて御子をみごもる。〔蛇女房婚姻〕

〈発端(二)〉異常誕生・成長

(5)十月に産所を用意すると、女房は、自分の産は三年後なれば、三十六丈の産所を作れという。三年がかりで、それを用意すると、七日のうちは入るべからずと言って、その内に入る。七日目、辛抱できず、俊祐が内をのぞくと、恐しい大蛇が幼い子を巻いて眠っている。〔蛇息子誕生〕

(6)八日になると、女房が三歳ばかりの若君を抱いて現れ、八日を待たずのぞきなさったので、日本の主ならず大将軍に留まると言い、日龍と呼ぶべしと涙を流す。また、日龍が三歳の時に父は死に、七歳の時に宣旨あるべしと予言し、自らは近江の益田の池の大蛇と名告り、虚空をさして去る。〔蛇女房別離〕

(7)日龍三歳になれば、すでに十二、三歳の気色に見えるが、その年、俊祐はみまかってしまう。〔蛇息子成長〕

(8)日龍が七歳になるとき、武蔵（近江）のみなせ川に住むみつくしのたけ（海満・海月）という大蛇退治の宣旨をたまわる。日龍は、家の宝の角の槻弓・神通の鏑矢を手にして当地に赴き、大蛇を攻めると、大蛇は日龍の伯父なりと名告るが、ついにその弓矢でこれを打ち殺す。〔大蛇退治〕

〈展開(一)〉悪路王征討・異常婚姻

(9)日龍、十六歳にて利仁将軍と称され。その頃、世にときめく（高尾）中納言に、照日の御前とて美しい姫君があり、利仁通って契りをかわす。が、時の帝が、照日の噂を聞かれて、お召しの宣旨をくだす。しかし、照日は、これに従わないので、帝は利仁を伊豆に流させる。利仁は、瀬田の唐橋にて、先年みなせ川にて滅した大蛇の魂よ、都へ乱れ入るべしと、板を踏んで伊豆へ下る。利仁の命により、大蛇の八頭が都に乱れ

入り、人々を噛み食う。博士の占いによって、利仁は許されて都へ戻れば、再び平穏な都となり、夫妻に二人の姫君が誕生する。〔帝の横恋慕〕

(10)利仁が内裏に参じて留守の折、照日の御前が南面の縁にあると、魔縁の者が来て、これを奪って去る。これを聞いた利仁は、夕げの占いによって、愛宕の教光坊・東山の三郎坊の教えを受け、五丈あまりの朽木に問えば、われは、利仁の母なる近江の大蛇の変身なりとて、照日は陸奥のかゝさん（田上山）の悪路王に奪われたこと、鞍馬の毘沙門天の力を借りて討てと教える。利仁は、鞍馬に参り、毘沙門天の示現を蒙り、多聞天の剣を得る。〔悪路王出現〕

(11)利仁、軍兵を率して、陸奥の初瀬の郡田村の郷に着く。それは七月半ばごろとて、早稲田の鳴子を引き鳴らす醜女を認め、一夜の契りを込める。利仁は神通の人なれば、御子の生まれるを予知して、そのしるしにとて、上差しの鏑矢を残す。〔醜女婚姻〕

(12)利仁、かゝ山に至りて、悪路王の城を見ると、鉄の築地にて、四十二丈の高さの構えである。東に、馬飼の女房と称する女があり、鬼の留守の間に帰らせ給えと勧める。利仁が悪路王の乗る地獄王（地獄龍）という龍馬に召して城内に入ろうとすると、龍馬は悪路王のいる越前に向かう。利仁怒って、剣を抜いて龍馬をせめると引返して城内に入る。その城の門を開こうとするが開かないので、都の方（鞍馬）を拝めば扉が開く。うちに入ると、他の女房たちとともに、嘆き悲しむ北の方を見る。やがて空掻き雲り、悪路王が現れる。利仁は、日月のごとき眼で睨み、多聞天からの劔を投げかけて、その首を打ちおとす。〔悪路王退治・馬飼女房の援助〕

〈展開(二)〉異常誕生・父子の邂逅

(13)利仁が契りを込めた田村の郷の醜女に、若君が誕生、伏屋丸（ふせり）と名づけられる。〔父なし子誕生〕

(14)伏屋丸が七歳になるとき、母に自らの父親を問う。母はやむなく形見の鏑矢を見せ、悪路王退治の将軍が父なることを告げる。〔母の告知〕

(15)その年の二月に、伏屋丸は、田村の郷を出立し、三年三月（十三日）かかって都に上り、利仁の築地に立つ。たまたま蹴鞠に興じていた利仁は、童を見て不思議に思い、邸内に招き入れると、伏屋丸は形見の鏑矢を見せ、母の言葉を伝える。利仁は、さてはわが子と、御所を作って住まわせる。〔父子邂逅〕

(16)朝ごとに、伏屋丸の衣の裾が濡れるので、利仁が人を付けて見させると、桂川の広い所を三度まで越えるので、確かに自らの子と確認、九歳より朝日御前と称す。利仁、ある時、朝日殿を試そうと、朝の食事をする所を突然に鏑矢で射ると、朝日殿は少しも騒がず、矢を箸にはさんで取る。やがて十一歳になると、父利仁の幼名の日龍殿と称される。また、利仁に、日龍殿を試そうと、剣を抜いて、受けてみよとて投げると、日龍殿は左右なく袂に収める。〔父子確認〕

〈結末〉栄進・転生

(15)日龍殿は、十三歳にて元服、稲瀬五郎（坂上）利宗と名告る。〔嫡男元服〕

(16)利仁、あとを利宗に託して唐土の征討に向かい、多聞天に念じて火印を投げると、唐土に火の雨が降る。不動明王、唐土のけいくわ和尚の願いによって利宗を迎え討つが叶わず。不動、日本に赴き、毘沙門天に会い、利宗失えば日本を守ると約して帰れば、利仁の首は不動によって打ち落される。〔父の横死〕

第二部【後・田村物語】

〈発端〉異常成長

(19)利宗十五歳となる時、奈良坂山の金つぶてという化身の盗賊を討つべしとの宣旨を賜わる。利宗が軍勢を率いて奈良坂山の峠に赴くと、二丈ばかりの法師の姿の金つぶてが襲いかかる。まず、二郎・三郎がつぶてを投げると利宗は扇で打ち落し、太郎がつぶてを打てば、鎧のはなで蹴おとす。さらに角の槻弓に、神通の鏑矢をもって、金つぶてを打ち取り、その骨を奈良坂山の峠にかける。これによって、利宗は、天下の将軍の宣旨を賜わる。〔金つぶて退治〕

〈展開(一)〉鈴鹿征討・異類婚姻

(20)利宗、ある時、帝から鈴鹿山の立烏帽子という不思議を打つべしとの宣旨を賜わる。五百余騎の軍勢を率いて、鈴鹿山に入り、一年間、それを探し求めてもその姿を見出せない。利宗は、ひとり留まって、三年、山中の小松原のなかに、極楽浄土を思わせる四季の屋形があり、そこに輝やくばかりの美しい女房を見出す。利宗、この女房に心引かれるが、心を強くして、剱を抜いて鈴鹿御前の櫛の上に投げる。鈴鹿御前は、少しも騒がず、立烏帽子姿となり、剱（だいとうれん）を投げる。利宗の剱は負け、金の鼠となって逃げれば、鈴鹿御前の剱は銀の猫となって追う。雉子となって逃げれば鷹となって追う。〔立烏帽子征討〕

(21)その時、鈴鹿御前、利宗の自らを思う心のうちを言い当て、夫妻とすべき女房は自分以外にないと語る。利宗も、その心あれば、二人は比翼の契りをこめる。かくして、利宗が鈴鹿御前と暮らすうちに、姫君一人誕生してしゃうりう殿（しゃうりん殿）と名づける。〔立烏帽子婚姻・姫君誕生〕

(22)その姫君が三歳の秋に、利宗、来たる八月十五夜に立烏帽子をたばかって参るとの文を雁に付けて内裏に届ける。それを知って女房は、利宗に恨みごとを述べ、あえて内裏へ参るという。八月十五夜に、二人が神通の車に乗って内裏に赴けば、数万騎の軍勢がこれを待つ。鈴鹿の女房は、帝にわれは天人なりと述べ、利宗に悪事の高丸退治の宣旨あるべしと伝えて、白鳥となって飛び立つ。〔立烏帽子内約〕

〈展開(二)〉奥州の悪玉征討

(23)立烏帽子の予告通り、利宗は、近江の蒲生山の悪事高丸を討つべき宣旨を蒙る。蒲生山から富士の嶽・秩父の嶽・足柄山・那須の嶽まで攻めるが、高丸は海中の嶋（日本と唐土の間）

に閉じ籠り、利宗は討つことができない。〔高丸征討〕

(24)利宗が軍勢を整えるため、都に退く途次、鈴鹿山を通り、鈴鹿御前をしのぶと女房と現じて、高丸退治を約す。利宗と鈴鹿御前の二人ばかりにて、神通の車に乗って外の浜に赴く。高丸は二人を見て八十の鬼をやって攻めさせるが、二人は四つの劔で、その鬼たちの首をすべて打ち落す。高丸親子七人は、石の城に石の遣戸を閉じて籠るので、二人は手が出せない。そこで、女房は、紅の扇にて十二の星を招き、雲の上に舞台をしつらえ、三ときばかり舞遊ぶ。その時、高丸のおと姫のきはた御前、これを見ようと石戸を細く開け、高丸も左の眼を差し出す。すかさず利宗これを射ると、高丸の首が地に落ちる。〔高丸退治・立烏帽子の援助〕

(25)鈴鹿御前、陸奥霧山ヶ嶽の大嶽丸退治の宣旨あることを予言し、その大嶽丸をたぶらかすために去る。利宗が高丸の首をもって帰洛すると、まもなく大嶽丸退治の宣旨が下る。利宗は龍馬にまたがり、空を飛んで、たちまちに霧山ヶ嶽に着くと、鈴鹿御前が利宗を城内に招き入れ、すでに大嶽丸の一の魂は抜いてあるという。やがて丈は四十丈、眼は七十二、面は六十の大嶽丸が現れて利宗に襲いかかるが、利宗は、鈴鹿御前とともに四つの劔で首をすべて打ち落す。〔大嶽丸退治・立烏帽子の援助〕

〈展開(三)〉夫妻の二世再会

(26)利宗は、鈴鹿御前とともに、大嶽丸の首を持参して帰洛しようとするが、鈴鹿は、自らの冥途に赴く日が近づいたとて、ひとり神通の車に乗って去る。利宗が、一旦都へ上り、帝に報告の後、急ぎ鈴鹿山に赴けば、鈴鹿御前はみまかって七日になるという。利宗が声をかけると息をつぎ、自らの宝劔を利宗に託し、残す姫君を頼むと言い残して、完全に息を引き取る。〔立烏帽子の横死〕

(27)その七日後、利宗は、鈴鹿御前を思う余りに、はかなくなる。冥界の閻王は、これを非業なればとて娑婆に帰そうとするが、利宗は、鈴鹿とともに戻ることを乞う。〔冥界訪問〕

(28)利宗腹を立て、鈴鹿御前からの宝劔を持って獄卒を討つ。閻王は困って、鈴鹿をも帰そうとするが、すでにその体がないので、同じ日時に生まれた近江のとうかいという女の体に入れ替え、三年の暇をとって、二人を娑婆に戻す。〔蘇生・再会〕

〈結末〉一族の栄華・神明示現

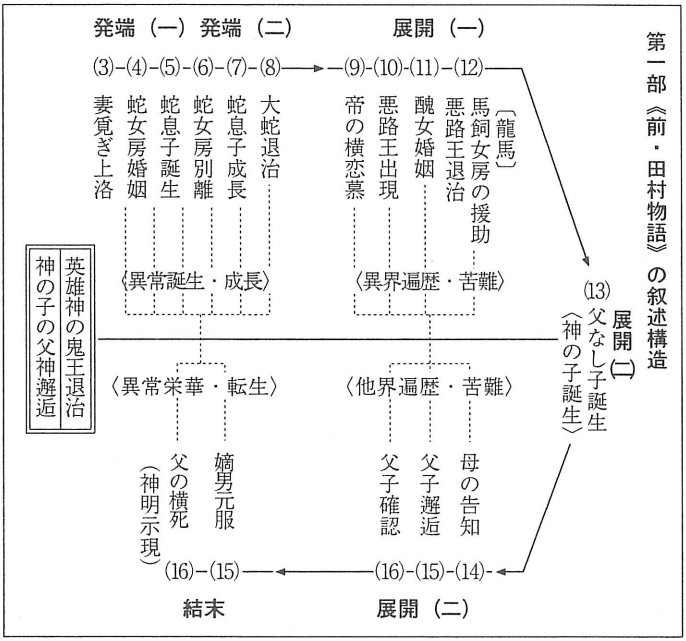
(29)利宗は、鈴鹿御前と娑婆に帰り、都（五条のあたり）に住して数多の姫君を儲けて将軍と仰がれる。鈴鹿の姫君も鈴鹿の主と祝われなさる。（利宗は観音の化身、鈴鹿御前は竹生島の弁財天の再誕なり）。〔繁栄・祭祀〕

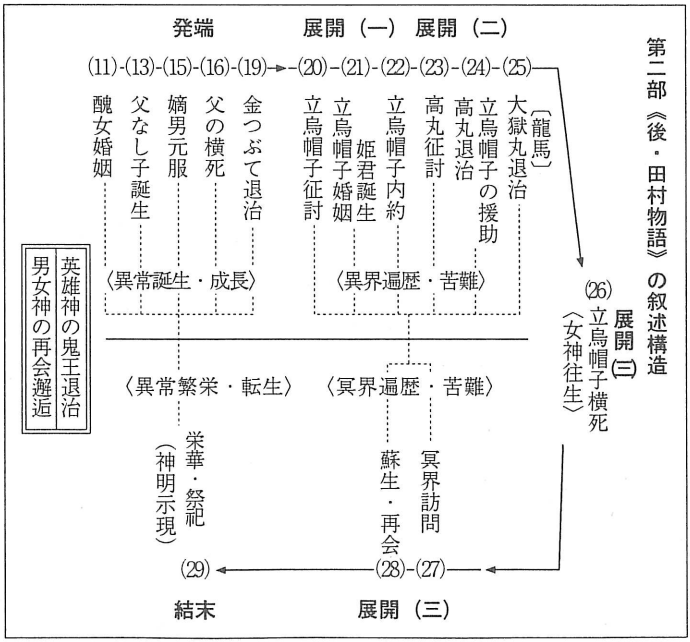
右の『田村の草子』の原拠となるものは田村麿伝・利仁伝である。そして、それとかかわる史伝的文献資料および伝説的伝承資料については、はやく柳田国男[28]・堀一郎氏[29]以来、かずかずの指摘があり、またわたくしも別に論じたものもある[30]ので、一応、それはおいて、先の『田村三代記』と対照比較

してみると、そのモチーフ構成において大きな異同はない。ただ前章にもふれたごとく、『田村三代記』は、第一部の〈発端(一)〉において、初代・利春の①〔星の子誕生〕〔笛吹童子〕の異常誕生・成長をあげて、全体を三代に及ぶ田村の事蹟を述べるという構成上の異同のみえることがあげられる。また、小さな異同としては、第一部の〈展開(一)〉において、(9)〔帝の横恋慕〕および(12)〔馬飼女房の援助〕を欠いて、(10)〔悪路王出現〕(12)〔悪路王退治〕というおどろおどろしい浪漫的叙述を⑩〔奥州派遣〕⑫〔蝦夷鎮圧〕という在地の伝承に応じた史実的叙述に変じている。また(11)〔醜女婚姻〕の舞台を陸奥・田村郷から⑪の利府の郷とするのも、奥浄瑠璃の伝承圏に移したものと想定される。一方、〈展開(二)〉において(13)〔父なし子誕生〕(14)〔母の告知〕は、〈山中誕生〉の趣向を添えた⑬〔父なし子誕生〕、〈山中修行〉〈山中邂逅〉の趣向を含んだ⑭〔母の告知〕という劇的な叙述をとっており、(15)〔父子邂逅〕(16)〔父子確認〕は、〈力試し〉の趣向を添えた⑮〔父子邂逅〕、〈荒馬鎮め〉のそれを含んだ⑯〔父子確認〕といかにも浄瑠璃的な叙述に変容している。また〈結末〉においては、利仁伝に応じた(18)〔父の横死〕を削り、(17)〔嫡男元服〕に悪玉御前の染殿大明神祭祀という趣向を添えた⑰〔栄花・示現〕として、在地の信仰に応じた叙述をとっている。次いで第二部においては、〈発端〉の⑲「金つぶて退治」を欠いて、主人公の異常成長という英雄神話的叙述を後退させる。また〈展開(二)〉においては、(25)〔立烏帽子の援助〕の〈龍馬入城〉を欠くことは次章であげるが、同じく(25)〔大嶽丸退治〕の舞台をいささか抽象的な〈陸奥霧山ヶ嶽〉から具体的に在地の〈奥州達谷が窟〉〈国分薬師〉〈龍門の山寺〉〈霧山天上〉〈箆嶽山〉〈鬼首〉をあげる㉕「大嶽丸退治」に変容する。おそらく奥浄瑠璃の伝承圏に応じた趣向と判じられよう。また〈展開(三)〉〈結末〉においてもそれはうかがわれるもので、〈霧山天上の寺〉〈達谷が窟の毘沙門天〉〈箆嶽山の千手観音〉の建立・祭祀をあげる㉖〔立烏帽子〕および〈小松の前の清滝権現〉〈姫君の正林寺地蔵菩薩〉の示現をあげる㉙〔繁栄・示現〕の叙述も在地の民間信仰に応じたもので、『田村三代記』のみのものである。そして第一部・第二部を通して、『田村の草子』が本地物としての叙述形式が希薄であるのに対して、『田村三代記』が、あくまでもそれにこだわることも特徴的であり、奥浄瑠璃が在地の民間信仰に応じて芸能的機能を果していたことの証左となるものでもあろう。

右のごとく『田村三代記』は、先行の『田村の草子』によりながら、当代の在地にこたえる浄瑠璃に仕立て直したと言えるが、その叙述の構成は、かならずしも『田村の草子』のそれを越えるものではない。したがって今、『田村の草子』によって、その物語構造を図示してみるが、それは『田村三代記』も、およそこれに準ずるものと言えるであろう。なお第二部の発端は、第一部の後半を引き継ぐものであるので、その(11)〔醜女婚姻〕

(13)〔父なし子誕生〕(15)〔嫡男元服〕(16)〔父の横死〕を重複して示すこととなる。





右のごとく、それは神の子ともいうべき英雄の異常な誕生から異界遍歴を経て、鬼王退治という異常な事業をなし遂げ、ついに神明に示現したという英雄神話に属するものとも言える。そしてその第一部の叙述構造は、〈神の子誕生〉なる〔父なし子誕生〕を折り返しのモチーフとして、父・利仁の〈異常誕生・

成長〉を叙述する**発端**と、子・利宗の〈異常栄華・転生〉を叙述する結末とが反復対応し、同じく父の〔異常遍歴・苦難〕を語る**展開**(一)と子の〔地界遍歴・苦難〕を語る**展開**(二)とが反復・対応するという裏返し反復の双分構造によっており、あるいは、それは二度に及ぶ〈遍歴・苦難〉と反復して、〈異常誕生〉から〈異常転生〉へと回帰する円環構造によるとも言える。また第二部のそれは、〈女神往生〉なる〔立烏帽子横死〕を折り返しのモチーフとして、主人公・田村の〈異常誕生・成長〉を叙述する**発端**と田村・立烏帽子折夫妻の〈異常繁栄・転生〉を叙述する**結末**が反復・対応し、立烏帽子の援助による田村の〈異界遍歴・苦難〉を叙述する**展開**(一)(二)と立烏帽子を求める田村の〈冥界遍歴・苦難〉を叙述する**展開**(三)が反復・対応するという裏返し反復の双分構造に従っており、あるいはそれは、第一部と同じく二度に及ぶ〈遍歴・苦難〉を反復して〈異常誕生〉から〈異常転生〉へと回帰する円環構造によるとも言えるのである。しかれば、第一部と第二部の叙述構造は、きわめて近似したものであると言える。しかし第一部は、その叙述構造の折り返しのモチーフを〈神の子誕生〉として、その神の子の〈父神邂逅〉を副次的主題とするのに対して、第二部は、その折り返しのモチーフを〈女神往生〉として、主人公の男神との〈再会邂逅〉を副次的主題とするという異同が見出される。そしてこの英雄神の〈父子邂逅〉と〈夫妻再会〉とが、かかる英雄物語の基本的モチーフ（主題）となることは、後に改めて叙述することになる。

三、「馬の家」物語としての「田村物語」

右にあげたごとく、第一部の【前・田村物語】と第二部の【後・田村物語】とは、〈鬼王退治〉を主題として、相似の叙述構造をもつものであるが、前者は主人公の〈父子邂逅〉を副次的主題とし、後者は主人公たちの〈夫妻再会〉を副次主題とするという異同が見出されるものであった。しかるにその中心主題たる〈鬼王退治〉の叙述にも、相似のモチーフを含み、かつ相対的な表現がみられる。それは主人公・英雄の〈鬼王退治〉における竜馬にかかわる叙述である。そしてわたくしは、この叙述にこそ「田村物語」の古層を見出せると考えている。つまりそれは「小栗判官」に準じた「馬の家」物語[31]としての古層である。が、とりあえずそれぞれの叙述を検討してみよう。

(一)【前・田村物語】の〈荒馬鎮め〉

まず『田村の草子』によって、【前・田村物語】の**展開**(一)・(12)〔悪路王退治〕の叙述をあげてみよう。すなわち、利仁は、母なる大蛇の変身の朽木の教えに従い鞍馬の毘沙門天から宝剣を賜わり、北の方なる照日御前を奪った悪路王を討たんとして、陸奥の国に赴き、田村の郷にて、早稲田の鳴子を引きならす醜女と一夜の契りを込めた後のこと、いよいよ悪路王の居城に迫る場面である。

〔慶応・古写本〕これより、かた山（ママ）は、いか程、有そと、人に、とひたまへは、これより二三十里は、おにの、すみかにて候、

さらに人かよはすと申、やう〳〵、いそきたもふ程に、かゝさんへそ、おわします、みたまへは、あくろわうか、しやうのありさま、くろかねのついちをつき、たかさは、四十二ぢやうにつきたりける、とし人、ひんかしのはうをみたまへは、としの程、廿四五はかりなる女房、なみたをなかして申やう、われはこれ都にて、みのゝせんしと申物のむすめなり、十三のとしより、おにゝとられて候か、ことし三ねん、むまかいの女房と、なつけられて、もんのまほるなり、都の人と、みまいらせて候へは、なつかしくこそ候へ、これは、きしんのしやうなり、ほんふのきたらぬ、ところなり、みちに、まよひたまふか、いそき、おにのなきままにかへらせたまへと、おほせられけれは、さて、おには、いつくへそと、とひたまへは、ゑちせんへとて、きのふより、まかりて候と、のたまへは、とし人、いかにして、もんのうちへ、いり候そと、のたまへは、これにちこくわうと申、むまにのりて、ちゝおに、はいりて、もんをは、うちよりひらきて、のこるおにともをはいれ候なりと申せは、とし人、うれしさ、かきりなく、おほしめして、まさしくこれそ、たもんてんの、御つけなりとて、よろこひたまひける、とし人は、このちこくわうを、とりてのり、ついちのうちへ、いらんと、したまへは、もんのうちへは、いらすしておにのいたる、ゑちせんへとて、ゆく、とし人は、いかりをなしたまひて、つるきをぬき、ちくしやうなりとも、りうは、むまのわうなり、又とし人も二さうをさとれるものなり、たゝいま、いのちとゝめんとのたまへは、ひきかへして、もんをひらかんと、したまへは、さらにあかす、そのとき、とし人、都のかたを、ふしおかみ、きねんしたまへは、そのとき、このもん、あきにけり、

〔慶応・万治写本〕是ヨリ、谷峯（コクホウ）山ト云所へは、いかほとそと、尋給へは、是ヨリ一日路なり、此三とせは、鬼神の栖と成テ、七里の内ニ、人はなし、とそ申ける、天より、谷峯山へそ、おはしける、悪良王か城の邊を、見給へは、鉄の築地を、四十五丈に架テ、四の門を、つよくかためて、いかにして、行へきやうそ、なかりける、東の門に、女の、うちしほれて有けるを、いかさま、魔王の物、我をたふらかさんトテ有覧と、覚語（マヽ）し、俊人、釼ヲぬきて、あて候へは、此女房、泪を流、申けるは、我はこれ、美濃前司の娘なり、鬼にとられて、今年は、百界の女ト、名付けられて、門を守候也、是は、深き山に、迷せ給たる人成り、鬼ノなきまに、いそき、帰られ給へとそ、申ける、扨、鬼は、何くゑ行て候やト、問給へは、越前へトて、おとゝい、出て候なり、あすの午之時には、来り候はんと、の給ひけれは、俊人、被仰けるは、此門の内へは、いかにして、入候へきそと、被仰けれは、是に、地獄龍ト云、門ヲ関て、残り九人の子をは、いるゝなりトそ申ける、然に、諸天神の御計にや、美濃前司は、門外にて、十三にて失シ、姫君に、尋相けり、俊人は、地獄龍に乗て、入給はんトし給ふ也、門の内には、不入して、鬼の行ける、越前へ向て、

飛行、其時、俊人、釼ヲぬきて、の給ひけるは、畜生成と云共、龍は、馬の司成り、命惜は、門の内へ入へしと、言葉も終さるに、城の内へ、飛入ぬ、

これによると、利仁が悪路王の鉄の居城を訪ねると、その東門に美濃前司の娘がおり、捕われて馬飼の女房（「むまかいの女房」「百界の女」）と名づけられて、門を守らされている。悪路王の入城の方法を問えば、慶応・古写本は、「ちこくわうと申、むま」、慶応・万治写本は「地獄龍」によると答える。が、これは、慶応・古写本も、利仁のことばとして、「りうは、むまのわうなり」とあるので、万治写本の「地獄龍」によるのがよいであろう。つまり、美濃の前司の娘が勤める馬飼の女房とは、その「地獄龍」なる龍馬を門前に養い、それによって鬼神たちを城内に導き入れる役のことであった。幸いに鬼神の王たる悪路王は、越前に赴いて留守であれば、利仁は、美濃の前司の娘が養う「地獄龍」に乗って入城しようとすると、この「地獄龍」は主君のいる越前に向かう。が、古写本は「ゑちせんへとて、ゆく」とあるのみであり、万治本は「越前へ向て、飛行」とある。しかし、古写本も、先に、四十二丈の高き築地の城を「ちこくわうと申、むまにのりて、ちゝおに、はいりて、もんをは、うちよりひらきて」とあれば、この「地獄龍」は天空を自在に飛び行く龍馬と理解されるであろう。そして、宝剣をとって利仁は、その「地獄龍」を鎮めて、みごと城内に入り得たのであるが、その鎮めの詞は、単におどしの文句のみではなく、「りうはむまのわうなり」「龍は、馬の司成り」という馬讃めの文句によるものである。つまり、宝剣の威嚇によって果されたごとくであるが、実は、いわゆる馬の宣命によって、利仁の荒馬鎮めはなし遂げられていたのである。

ここに至れば、当然、鬼鹿毛鎮めの『小栗判官』との近似が問題となろう。たとえば、かの鬼鹿毛は、死骨・白骨のるいるいたる萱原の無間地獄のごとき厩の構えのなかで、人まぐさを食らう、畜生のなかの鬼であったが、これは、人々をとらえて食らう地獄の王ともいうべき鬼神の悪路王に養われる「地獄龍」であった。あるいは、龍のごとく荒鷹のごとくに疾駆する鬼鹿毛は、四十二丈の築地を飛び越え、天空を駆け行く「地獄龍」に通じると言える。そして、荒馬・龍馬を乗りこなすとは、主人公はそれと一体化して、悪神・英雄神に昇華することであるが、それとかかわって、小栗判官・坂上利仁ともに、龍蛇と密なる交渉があるという素姓においても、両者が相通じることは、はやく高田衛氏が説いておられる。[32] しかし、この段階において、直接的影響関係を問題とすべきではあるまい。それは、後述するが、「馬の家」の物語ゆえの一致と推される。先の馬讃めの宣命も、それであるし、遊行巫女に通じる「照手御前」（『小栗』）「照日御前」（『田村』）などを主人公の恋人・北の方役に登場せしめることもそれぞれが、その物語の伝統に従っているものと、今は判ずるべきであろう。

ところで、右にあげた利仁の龍馬乗り鎮めの叙述は、諸本間で、

それなりの異同が生じている。すなわち、それは、慶応・古写本と同万治本との間にも見られたことであるが、たとえば、天理蔵写本においては、城門を守る美濃の前司の娘を「馬飼の女房」と叙してはいるが、その仕える馬を「龍の駒」とするのみで、「地獄龍」の呼称を失っており、寛永古活字版においては、美濃の前司の娘を「もんまもりの女」として、「馬飼」を欠き、その馬も、「龍の駒」と叙すのみとなっている。が、各諸本は、いずれも利仁の龍馬乗り鎮めを叙述していると言えるが、大東急蔵奈良絵本によると、そのモチーフも全くうかがえず、利仁は「この女はうをさきにたて、さうなくうちに入てみ給へは、云々」と叙されるばかりとなっている。一方、『田村三代記』は、前章において検したごとく、⑪「悪路王出現」⑮「悪路王退治」に代えて、⑩「奥州派遣」⑫「蝦夷鎮圧」をあげるものであり、それゆえに、かの【前・田村】の龍馬乗り鎮めの叙述を欠くことになったかのごとくである。ところが、そのモチーフは、全く喪失してしまったのではなく、後の⑯〔父子確認〕の場面に、先送りされた形で見えるのである。すなわち、母の悪玉から自らの実父が、利光将軍である由を知らされた千熊は、上洛して利光の屋形を訪ね、力試しに耐えて奉公が許されるが、ある日、利光の命に従う源太に誘われ、悪馬なる鬼鹿毛を乗り鎮めることとなる。

　此馬、いつもの 秣（まくさ） とや思ひけん、頭を振って前掻す、その長一丈にあまり、人を服すと打見えて喜ぶ体（てい）のすさまじく、死骨白骨山の如し、南無三宝をかたへに寄り、いかに鬼鹿毛、畜生なりともよつく聞け、我をば誰と思ふぞや、この家（や）の主（あるじ）将軍利光の実子九門屋にて成長（しやうちやう）したる千熊なり、牛はこれ大日の化身、馬は観音の化身なるもの、いかでか以て人間をとり食ふ法やある、おのれわが一言聞分けて我を敬ひ従はば、正一位の位を授け黄金の壷を供養し、馬頭観音と崇むべし、また聞分けなく我に敵するものならば、焦熱地獄に堕入るべしと仰せ聞かされ給ひしかば、畜生とは言ひながら、かかる仰せ耳に入れしか、四足を折りて腹匍ひし、涙を浮べ、御乗りなされと言はぬばかり、若君御覧じ、（中略）四方の鎖を解きほどき、身軽にしやつと打乗りて、捨鞭はつしと打ちければ、躍上り蹴上り、厳しき木戸を踏破り一文字にかけ出すは、外山（と）の鷲が餌（うえ）にかつえ兎一匹見付けつつ、羽総（はぶさ）を折って飛び下るよりも尚早く、桜が馬場へと乗込んだり、人々驚き舌を捲いて見物す、千熊もとより馬上（ばしやう）の達者、百手（ももて）を千手に砕きつつ、漣立（さざなみたち）に青海波、獅子の洞入、蜻蛉返（とんぼ）り、韋駄天走、逆乗立乗、泥障（あふり）を踏立て踏立て鉸具（かこ）をあてて乗つたりける、……

右の千熊による馬の宣命から曲乗りに至る鬼鹿毛乗り鎮めの叙述は、すでに荒木繁氏が指摘されるごとく、[33]説経『小栗判官』と同趣向と言える。そして、それは、しばしば同文的部分が見出されて、直接的影響関係も判じられる。つまり、奥浄瑠璃『田村三代記』は、【前・田村物語】において、⑪〔悪路王出現〕⑮〔悪路王退治〕を⑫〔奥州派遣〕⑫〔蝦夷鎮圧〕に改案するにあたり、

〔悪路王退治〕に含まれた〈龍馬鎮め〉を先送りし、かつ、『小栗』の趣向に改変しながら、⑯〔父子確認〕に挿入して、その叙述を脚色したものと思われる。が、それは、やはり、「馬の家」物語の伝統から後退する展開であったと言わねばなるまい。

(二)【後・田村物語】の〈龍馬養い〉

次に、再び『田村の草子』に戻って、【後・田村物語】の展開(二)・(25)〔大嶽丸退治〕の叙述を検してみよう。すなわち、立烏帽子の援助によって高丸退治を果たした利宗に対して立烏帽子は、陸奥の大嶽丸退治の宣旨あることを予言し、その魂をあらかじめ抜くためにとて大嶽丸の許に去るのであるが、注目すべきは、予言通り三年後に宣旨があって、利宗が大嶽丸の住む霧山ヶ嶽に赴く場面である。

〔慶応・古写本〕さて、六のくに、きり山かたけに、おにあり、わかてうをまわうのすみかと、なさんとす、いそき、これを、うちてまいらせよと、せんしなり、たむら殿は、かねて、こしらへたまへは、しさいなしとてりやうしやう申、そはやのつるきをはき、りうむまに、きんふくりんの、くらをおき、うちていてたもふ、御ともと、おほせをかうふりたれは、かすみのけんたいとのたまふ、御大しやうとゆく、そのとき、りうを、そらにひきむけたまへは、そらにあかりて、程なく、六のくに、きり山かたけ、くものつりとのに、つきたもふ、

〔慶応・万治写本〕既に三とせと申に、帝王ヨリ、宣旨成り、陸の国、霞山なる嶽の、大竹ト云、魔王の物有て、日本国の人種を滅て、我朝を、魔王の栖トなさんとそ、悪業企、たけき魔王共、皆、ほろひたり、よの鬼千人ヨリも、かれら十人は、勝たりトいへとも、是ヲ、ほろほして参らせよと、宣旨成けり、本より、こせられたる事なれは、態、思ふ用のありとて、御勢をは、給はらすして、たゝ一人、彼龍に乗て、かなみの源太ト申て、一の郎等に、そはやの釼をもたせて、三百余里の道なれ共、たゝ一足にそ、飛つかせ給ひけり

右によると、主人公の利宗は、大嶽丸討伐の宣旨によって、早速に「龍馬」に乗って、天空を駆け、たちまちに、その嶽に着いたという。が、立烏帽子の予言があって、「かねて、こしらへたまへは、しさいなし」とは言いながら、その「龍馬」は、どこで用意されたのか、いささか唐突な感がある。そして、その説明があれば、利宗将軍の供が「かすみのけんたい」、または「かなみの源太」ただ一人ということも、余程、納得がゆくものになろう。ところが、後者の万治写本は、「彼龍」とあげているごとく、右の本文に先立って、その「龍馬」について、相当に詳しい紹介をおこなっていたのである。すなわち、立烏帽子の鈴鹿女房は、大嶽丸退治の宣旨を予言して利宗の許を立ち去るのであるが、

鈴鹿、申されけるは、縦、大竹来りたり共、とられしと思はんは、童か心にてこそ、候へ共、是も、殿之御事を、思ひ奉れはこそ、態、とられて、正念を抜て、やすく、殿に、討せ奉らんため成、急、上り給ひて、此度は、よからん馬にめして、一人御下候へと堅く申されけれは、ちからなくて、田

村殿は、都へ上り、鈴鹿は、わかかたへそ、帰られける、とあり、これに応じて、叙述は、次のように進行している。

将軍は、乗へき馬や、有らんと、尋給ふに、甲斐、信濃より、みちのく迄、尋給ふに、可然、馬もなし、五条大宮に、たをかれ馬に、縄をはりて、五所にかけて、つなきたり、田村殿、是を御覧して、此馬は、売馬かと尋給ふ、内より、五十計なる翁出て、売馬にて候、かわせ給へト、申せは、此馬は、いくらそと、問給へは、三貫文ト申せは、此馬には、おうするとも、よもおはし、是の替りはと、の給へは、一貫五百文とそ、申ける、更は、明日、武士の小路の、将軍の御前へまいれとそ、被仰ける、おきな、廐に立寄て、申けるは、畜生成といへとも、馬は馬頭観音の化身なり、此三とせの間、是に有けるしるしに、構て〳〵、明日の寅時迄、いきよ、壱貫五百文の銭は、しそんに、とらすなトテ、くときける、夜も明ければ、せうは、馬引出し、将軍の御前へ参ル、殿原、馬主もてなし候へと、被仰けれは、御ゑんに、請シけれとも、恐て、まいらさりけれは、ひちを取て、引きのほせられけり、酒をすゝめられけれは、盃をひかへて、十六度呑けり、さて、馬主に、引出物をせよとて、絹千疋、鎧百両、弓百張、白鞍をかせて、馬千疋、まくさの、りやうトテ、稲千束、か様に引出物の後に、馬のあたひとて、一貫五百文、渡しぬ、此尉は、夢かうつゝとも、おほへす、此馬うらさりける時は、京中一の、貧者にて有けるか、此馬売て後は、洛中一の、徳人にて有ける、

田村殿は、此馬に、くいを、四ツうちて、四ツの足を、やすめ給ふつるに、きりいね八束つつ、かわれける、此身にあまる程に、こゑたりけれは、くいを一ツぬきて、四ツの足を、三ツのくいにやすめ、此くいを、ぬき給へは、四ツの足を、弐ツのくいにやすめ、四ツのくいを、みなぬきては、此馬、ちうにあかりて、たつ、後には、三尺はかりあかりて、日数を送り給ふ程に、……

とあって、先の大嶽丸討伐の叙述に続く。つまり、立烏帽子の教えによって、利宗はあらかじめ良馬を求め、龍馬に飼育して、宣旨を待ったという。勿論、慶応・古写本と比すれば、この方が増補かとも推されるが、すでに注意したように、古写本は簡潔に過ぎて、前後の叙述に矛盾が感じられるのに対し、これはそれなりに必然ある叙述となっており、かつ、古写本を除いて、多少の異同は含みながら、各諸本がすべてこの叙述を含んでいるものであれば、あるいは、これを元来的叙述と判じてよいのかと察せられる。

さて、これによると、利宗は、高丸の首をもって帰洛して、帝に見参申し上げた後に、各地に良馬を探し求めても得られぬ折に、たまたま五条大宮に、「たをかれ馬に、縄をはりて、五所にかけて、つなきた」るものを発見するのである。これを天理写本では、「あし毛なるむまの、さゝはたうれよけなるをはつなを五ところにかけて、つなきたり」とあり、寛永古活字版では、「よのつねの馬五つ計、一つにしたる程の馬を、かなくさりに

て八方へつなきたるか、百日にも、まくさくれたり共見えす、引立るとも、一足もゆくべきとも見えず」とある。後に馬主の尉は、「明日の寅時迄、生きよ」と口説いていることからすれば、この馬は今も息たえだえで、かろうじて、五つの縄で支えられているほどの痩せ馬と解される。それをあえて、一貫五百文で予約するのであるが、馬主の翁は、大いに喜んで、厩に立ち寄り、「畜生成といへとも、馬は馬頭観音の化身なり、云々」と、『小栗判官』の馬の宣命に通じる馬讃えをおこなっている。が、勿論、ここでは、『小栗』との直接的影響関係は言えない。やがて、馬主の翁が、その痩せ馬を連れて、武士小路の利宗将軍の御所に参ずれば、利宗は、翁を酒にてもてなし、一貫五百文の上に、絹千疋、鎧百両、弓百張、白鞍置いた馬千疋、秣料稲千束など、たいへんな引出物を与えている。天理写本も、ほぼ同文の叙述が見られるが、寛永古活字版は、「かのおきなに、百石百貫に、色よき小袖をそへて、下したまふ」とある。ともあれ利宗は、たいへんな代価によって、その痩せ馬を自分のものとしたというのであり、後の展開によれば、これは主人公利宗がいかほど相馬のわざにたけていたかを強調した趣向であることが理解される。ところで、その痩せ馬は、利宗の目利きにたがわず、「ちゆうに上かりて立つ」龍馬に育成されるわけであるが、むしろ主人公が、龍馬を飼育するわざを保有していたとすることを注目すべきであろう。これについて、天理写本は、「しやうくん、くゐを、うちて、このむまの、あしをやすめ、一日に、きりいね八そう、かはれける、さる程に、このむま、しゝ身にあまりける、ひるは、このくゐをやすめ、中に一しやくはかりあけて、たちけり」と、簡略化しながら、その龍馬飼育のわざを叙している。これならば、恐るべき大嶽丸を打つことは可能であり、供の者は只一人であって差し支えないことになる。が、寛永古活字版では、すでにこの叙述が後退して、「其馬をかひ給ふに、世中にならひなき、めい馬にて、俊宗乗給へは、山をかけり、海をわたるも、おなし平地のことし、ふしきに思召、すゝかへゆかんと思ひ、乗出し給へは、せつなか間に、つき給ふ」と、その名馬の不思議のみが誇張されている。

わたしは、【前・田村物語】における主人公の「地獄龍」乗り鎮めの叙述に、「馬の家」物語の伝統を見たのであるが、【後・田村物語】においては、主人公を「龍馬」飼育の上手とする叙述にそれをみるのである。そして、その「龍馬」発見・飼育のわざは、「龍馬」を自在に飛行せしめるそれでもあれば、その主人公は、かならずや英雄神に変身するものであり、天界・霊界の遍歴が期待されることになる。つまり、この主人公にとっては、立烏帽子なる女神の援助による魔界の鬼神退治も、死せる女神の魂を求めての冥界遍歴も、必然的な展開ということになる。そして、これは、もう一つの「馬の家」物語の伝統にある『小栗判官』と通じるものとなろう。

ところで、主人公利宗の「龍馬」飼育の叙述が、諸本間で、多少の異同のあることは、いささか右にふれてきた。が、その

なかで大きく異同するものに、大東急蔵奈良絵本がある。すなわち、それは、「たけ七き八ふんのれんせんあしけなる馬の、ふとくたくましきか」、いずくからともなく禁中の大庭に現われ、公卿僉議の末に、鬼神征討の利宗将軍にそれが与えられると、

としむね大ちからのむまのりなれは、かたしけなしとて、やかてきんちうの御にはにて、このむまをひきよせ、ゆらりとのりひとむちあてゝみ給へは、いさみにいさんたこのこまなれは、中につんとはねあかり、けつくわもんをとひこえ、しゝんてんのまこひさしの軒のつまをそはしりける、人〳〵あつといひけれとも、としむねはすこしもおとろき給はす、たつなをゆるめ、くらつほをのりうけ給へは、さしもにたかき軒端より、まつさかさまにそおとしける、くらのまへわにをしかゝつて、たつなのひしゆつをつくされけれは、右近の橘さこんの桜を四本かゝりとのりまわし、ひきよくをつくしてせめ給へは、はしらをのほりかへをかけり、おもしろしとも中〳〵、前代みもんのけんふつなり、……

と叙述される。もはやこれでは、利宗の龍馬発見の相馬のわざは姿を消し、また龍馬育成の養馬の術も披露されず、それにかわって、禁中・内裏における主人公のみごとな乗り鎮めが叙されて、『小栗』の鬼鹿毛鎮めと直接的関係さえ感じられるものとなっている。そして、鈴鹿御前の予言通り、越中立山に鬼神現れるとき、「いかにもして、すゝかにあひ奉り、ちからを頼むへき」とて、

あるときかのむまをせめたまふか、心のまゝにしたかひけれは、いかさまつねの馬にあらす、はとうくはんおんのけしんにてやあるらんとおほしめし、馬にむかひての給ふやう、なんちしやうあるものならは、すゝかのありかへつれて行てえさせよ、さもあらは一つのたうをこんりうして、なんちかほたいをとふらふへしとのたまへは、なにとも物はいはねとも、まへひさおつて、きたむきにこそふしたりけれ、さてはつれて行へきかと、ようひ一しゆくして、田原の源五かねまさに、くちをとらせてうちのり、馬にまかせてゆくほとに、たゝ二時はかりに、ところこそおほかるに、越中のたて山おにかいはやにつきにける、（中略）いはやのうちへこまをのりこみ、うちのていをみ給へは、すゝかはうちよりはしりいて、……

と叙される。ここに至れば、『小栗』の馬の宣命と同文的詞章も見えて、その影響にもとずく修辞・脚色による叙述の展開と判ぜられよう。つまり、「馬の家」物語なる元来の「田村物語」が、もう一つの「馬の家」物語たる『小栗判官』の流行に追随して、これを習合させていったというのである。一方、⑯〔父子確認〕の叙述において、すでに『小栗』の鬼鹿毛乗り鎮めの趣向を用いた奥浄瑠璃『田村三代記』は、主人公の「龍馬」飼育の叙述をあげぬのみならず、『小栗』のそれを二度と用いる方法はとっていない。ただ、立烏帽子が、大嶽丸退治の宣旨を予言して主人公の許を去る折に、「必ず〳〵大勢にて下らせ給ふまじ、主従二人か三人にて名馬に召され御下りあれ」と教え、やがて宣

旨あれば、「御供には霞ノ源太盛春を只一人御供にて」「駒も静に乗懸」と叙されている。が、その駒は、東海道から奥州街道の宿々をたどり行くもので、もはや天空を駆ける「龍馬」の面影は見出せぬものとなっている。つまり、ここにおいて「田村物語」は、「馬の家」物語としての性格を随分と後退させていったことが知られるのである。

なぜ、このような状況が生じたかは、やはり、「馬の家」物語なる「田村物語」を支える社会的状況の変化に求めざるを得ないであろう。およそ『田村の草子』は、奥州方面の野牧において育成された「馬の家」田村氏の伝承を吸収して、京洛の地で制作されたものと推されよう。そしてその『田村の草子』またはそれとかかわる古浄瑠璃を原拠として成ったのが、在地の奥浄瑠璃『田村三代記』であるが、それは養馬のわざに深い関心をもった奥州の文化状況が大きく変貌するなかで生成されたという事情が考えられる。が、それについては、いずれ別稿において詳述することとしたい。

四、「馬の家」物語の原型的伝承

さて、「馬の家」物語の伝承を踏査するなかで、わたくしはその原型的伝承を奄美地方のユタたちが唱誦するターベ「思い松金」に、それを見出すのである。それははやく山下欣一氏が紹介されたもの[34]であるが、今は外間守善氏他編の『南島歌謡大成』V〔奄美篇〕[35]をもってあげてみる。

一　ホーととん（ホー尊貴）
二　ばさのばさんながれ（芭蕉の芭蕉ナガレ）
三　ひとくだり　よみおろすんど（一下り読み下すぞ）
四　あがんながさん　ながをすぢ（あんなに長い長尾筋〈根〉）
五　一里　二里　うしんし　ととん（一里　二里　ウシンシ〈囃子〉尊貴）
六　おてんと　きょらばさやまば（お天道清ら〈美しい〉芭蕉山を）
七　あがんきょらさる（あんなに清らかな）
八　おもいまつがねが（思い松金〈神〉が）
九　うしん　みたてぎょらさ（ウシン〈囃子〉見立清らかな）
……
一三一　あがんきょらさる（あんなに清らかな）
一三二　おもいまつがねが（思い松金が）
一三三　七ひろきょらばさぬのが（七尋清らの芭蕉布を）
一三四　ふしこしれとりゅん（干し拵えしておいて）
一三五　ふしこしれとりみそうれば（干し拵えお取りなりましたら）
一三六　たくび　ぎょらさ（畳み清らかさ）
一三七　たくび　とりみそうれば（畳みお取りなりましたら）
一三八　たちとりぬ　きょらさ（断ち取りの清らかさ）

一三九　たちとりみそうれば（断ちお取りになりましたら）
一四〇　ぬいととねぬ　きょらさ（縫い調えの清らかさ）
一四一　ぬいととね　とりみそうれば（縫い調えお取りになりましたら）
一四二　うちかけぬ　きょらさ（打掛けの清らかさ）
一四三　うちかけ　とりみそうれば（打掛けお取りになりましたら）
一四四　おてんとうに　とびあがり（お天道に飛び上がり）
一四五　おてんとうとびあがりみそうれば（お天道飛び上がりましたら）
一四六　ひとつきたち　ふたつきなり（一月経ち二月なり）
一四七　つきたち（月経ち）
一四八　しだいに　みもちになり　みそうたんど（次第に身持（孕）になりましたら）

……

二七〇　あざなしむんや（父無し者は）
二七一　みそで　ふりゃふりゃ（御袖振り振り）
二七二　やきあくぢな　むしとうりゅん（焼灰縄拐（むし）りとって）
二七三　またたちのまきに（また竜辰に）
二七四　うしんこもにととて（ウシン込みとって）
二七五　たちんぬみくだそうにとらるん（辰ん呑みくだそうと取られる）
二七六　うやなだが（親神が）
二七七　これや　じぶんの　くわであるから（これは自分の子であるから）
二七八　じぶん　のみくだしてくれと（自分を呑みくだしてくれと）
二七九　たちにむねせつかん　とうりゅん（辰に胸折檻をする）
二八〇　しゅなえば（そうであれば）
二八一　あざなしむんも　あらん（父無し者でもない）
二八二　かみのくゎであれば（神の子であれば）
二八三　のみくだすんことや　できんと（　呑みくだすことはできないと）
二八四　たちのまきも　はりこえ（辰巻を張り越え）
二八五　ざのまきも　はりこえ（竜の巻も張り越え）
二八六　おみのまきも　はりこえ（鬼の巻も張り越え）
二八七　五つから　七つまで（五つから七つまで）

……

二九〇　げしぬくゎも　あらんど（下司の子でもないぞ）
二九一　てだのくゎど（太陽の子ぞ）
二九二　あみのくゎど　ありよんど（月の子でありますよ）
二九三　これからものよせ　しらば（これからもの教えしたら）
二九四　むねぎょらさや（胸清〈美〉らかさ）
二九五　はらぎょらさや　もって（腹清らかさをもって）
二九六　げしわやく　とらんぐうと（下司をからかわないように）

二九七　みすじ　ねぐらん　たねば（三粒　種の種子を）
二九八　こんさかにうとさば（この逆に落せば）
二九九　これさかの　げしぬくわにふさえとらん（これ逆の下司の子に房栄〈茂〉して）
三〇〇　しろこざまにほじょのりぐらかけて（白胡座馬に不浄の乗鞍掛けて）
三〇一　うちのらし　とらしえば（打ち乗らしてやったら）
三〇二　かたては　あざはをとり（片手はアザハをとり）
三〇三　かたては　うまのたずなをもち（片手は馬の手綱を持ち）
三〇四　七つの年に（七つの年に）
三〇五　一のさしば　さしおろされとて（一の差しを差し下ろされて）
三〇六　七のさばさしおろされとて（七の差しを差し下ろされて）
……（ユタ〈ホゾン〉に用いられるバサンナガレ）……

これは、ユタの方々が、成巫の儀礼をはじめ、その巫業のなかで唱誦されるもので、もっとも基本的なターベである。それは相当の長文に及ぶもので、その内容を要約して示すと次のごとくとなる。

〈発端〉異常婚姻

①美しい思松金が、美しい芭蕉山で、きれいな芭蕉を切り取り、芭蕉を美しく績み整え、みごとに切り整え、美しくつむぎ取り、美しく糸を束ね、みごとに織り整え、東の川に向って洗い、美しい芭蕉布を干して畳み、美しく裁断しみごとに縫い整え、その美しい打掛けをみごとに着る。（一～一三〇）〔聖女出現〕

②思松金が、その美しい芭蕉布の打掛けを着ると、お日さまが飛び上がり、一、二ヶ月たつと身ごもったことを知る。（一三一～一四八）〔日光感精〕

〈展開(一)〉神の子誕生

①親が身ごもらせた相手はだれかと責め立てる。相手は分らないが、十ヶ月で生まれれば下衆の子、十二ヶ月で生まれれば神の子と答える。〔一四九～一六四〕〔聖女の苦難〕

②十二ヵ月たって男の子が生まれ、イシクンダマルと名づける。四歳までは自分のそばで育てさせてくださいと親に頼む。（一六五～一七七）〔御子の誕生〕

〈展開(二)〉神の子の苦難

①その子が四、五歳になると、下衆の子が父なし子と笑い、弓競べをいどむ。父なし子は弓を作ってくれる親がないので、涙を流してお日さまを拝むと、お日さまは弓矢を降ろしてくれる。父なし子は、この弓矢で弓競べをして勝つ。次に下衆の子が舟競べをいどむ。父なし子がお日さまを拝むと、舟を降ろしてくれるので、それで舟競べをして勝つことができる。〔一七八～二二四〕〔御子の苦難〕

②次に下衆の子が馬競べをいどむ。父なし子がお日さまを拝む

と、竹馬を降ろしてくれる。父なし子が、その馬に乗ると馬はお日さまのもとに駆け昇る。（二二五～二二四）〔御子の昇天〕

〈展開(三)〉父子の邂逅

①天の太陽神は、鬼の牧に父無し子を押し込め、蛇の牧に押し込めるが、父無し子は、それぞれを乗り越える。次に竜の牧に押し込めるが、父無し子は、竜に負けずに竜の牧を乗り越える。（二二五～二七五）〔御子の試練〕

②試練に耐えたことで、天の太陽は、父無し子が自分の子であることを確認する。（二七六～二九二）〔神の子確認〕

〈結末〉巫祖の降臨

神の子は、太陽神から神祭のわざを教えられ、馬に乗って地上へ降り、司祭者のはじめとなる。（二九三～三二一）〔国土示現〕

右のごとくこれは日光感精神話に属するものであり、わたくしに神の子邂逅型と称するものである。しかもその神の子は、聖なる馬と同じく母の胎内に十二ヶ月あって誕生した御子であり、馬競べの折に天界から降ろされた名馬に乗って昇天、その天界の竜の牧において、みごとに竜馬を乗り鎮め、巫祖とし地上に示現するのである。そしてこれは、奄美のユタの人々にとっては、きわめて重要な巫祖神話であり、ユタはこれを唱誦するとき、巫祖と化すという機能を有するもので、特に成巫式において、このターベが吹き出るとき、新ユタの成巫は完成したものと観じられている。しかもこの巫祖神話は、次のごとく新ユタの七年に及ぶ成巫過程に対応するものである。

〈巫祖神話〉

〈成巫過程〉

(一)巫病の発現 ↑……↓(A)〔聖女出現〕

①罹病 ⋮↓(B)〔日光感精〕

②ユタめぐり

(二)成巫の予備儀礼 ↑……↓(C)〔聖女の苦難〕

①親神の選定

②家族の同意

③拝み神の決定

④遺品さがし（馬）

⑤ショーゴさがし（馬）

(三)成巫式 ↑……↓(D)〔御子の誕生〕

①海拝み・山拝み

②親子の別れ

③天ミシャク

(四)成巫の神拝み ↑……↓(E)〔御子の苦難〕

①毎日の神拝み（足） ⋮↓(F)〔御子の昇天〕

②月一日の神拝み・ショージゴ祭（足） ⋮↓(G)〔御子の試練〕

③年一回の神祭

(五)成巫の確認 ↑……↓(H)〔御子の確認〕

①三年祭 ⋮↓(J)〔国土示現〕

②七年祭

そして(二)の成巫の予備儀礼における④「遺品さがし」や⑤「ショ

ジゴさがし」も、かつては新ユタが馬を駆しておこなうものであったというが、(三)の成巫式における①海拝み・山拝み（ショウジ拝み）において唱誦されるターベ「マレガタレ」（生れ語り）には、聖なる馬に股がる新ユタの姿が、今にしのばさせるものとなっている。次にそれをあげてみる。

(I)（発端部）

1 きゅぬよかるびに（今日の良き日に）
2 きゅぬまさるびに（今日の勝る日に）
3 いちぬてぃんあけて（一の天あけて）
4 ななぬてぃんあけて（七の天あけて）
5 いちのさせおろし（一のさしおろし）
6 ななのさせおろし（七のさしおろし）
7 あさをじまうりてぃ（あさをじまおりて）
8 あまたじまうりてぃ（あまたじまおりて）
9 いちぬかみゆびよせて（一の神を呼び寄せて）
10 ななぬかみゆびよせて（七の神を呼び寄せて）
11 かみさかきとりまわし（神の榊を取り廻し）
12 いそにじきくりあげて（いそに敷をしき）
13 たまにじきくりあげて（玉に敷をしき）
14 ひのきぶんくりあげて（檜の高膳をささげ）
15 こがねぶんくりあげて（黄金の高膳をささげ）
16 つきのぶんくりあげて（月の高膳をささげ）
17 あさひぶんくりあげて（朝日の高膳をささげ）
18 ほぞのりぶんおしあげて（神の高膳をささげ）
19 いちがはなおしあげて（一の花をささげ）
20 みじがはなおしあげて（水の花をささげ）
21 やまとやしろからくだしゃる（大和山城から下ってきた）
22 なかばしら（線香）
23 いちとぼしとぼしあげて（一とばしあげて）
24 ななとばしあげて（七とばしあげて）
25 やまとやしろからくだる（大和山城から下ってきた）
26 あやはがね（刀）
27 みずはがねうしあげて（水の刀ささげて）
28 いそすだれひきまわされて（いそ簾を引き廻し）
29 たますだれひきまわされて（玉簾を引き廻し）
30 ぎんのびょうぶたてまわし（銀の屏風立て廻し）
31 くがねびょうぶたてまわし（黄金の屏風立て廻し）

(II) 展開部

32 てんぬまくだりほぞのりまや（天から下った神の乗り馬は）
33 ましろきわかさんせ（真白毛の若三歳）
34 きんぬくらうちかけて（金の鞍を打ちかけて）
35 まえはるびしめじめと（前腹帯はしっかりとしめて）
36 しりはるびしめじめと（後腹帯はしっかりとしめて）
37 にぎりあぐんたれだれと（右のあぶみはたれて）
38 ひざりあぐんたれだれと（左のあぶみはたれて）
39 まえぐらやてだぬかたとらさげて（鞍の前には、太陽の

型をとり）

40 うしろぐらやつきぬかたとらさげて（鞍の後には、月の型をとり）

41 にぎりがたやまひてがたとらされて（右側には、まひさがたをとり）

42 ひざりがたやはびらがたとらされて（左側には、蝶の型をとり）

43 わんどごちはりはめて（クツワをはめて）

44 いそたちなひきまわし（糸手綱を引き廻し）

45 まひきぬこたらじょ（馬曳きの小太郎よ）

46 わんぬてだがみがうちのりかけて（私の日の神が打ち乗られ）

47 あがんきょうらさるばばぬみちひるみち（あんなにきれいな馬場の道、広い道を）

48 あしならし（足音高く）

49 ちみならし（爪音高く）

50 うりんうりぎょらく（きれいに下っていく）

51 いちぬなみかけて（一の波をかかり）

52 ななぬなみかけて（七の波をかかり）

53 かみんかみぎょらく（きれいにかかり）

54 とりんとりぎょらく（とるのもきれいに）

55 あがんきょらさる（あんなにきれいな）

56 さをじごうりて（精進の川に下って）

57 うりんうりぎょらく（きれいに下って）

58 いちぬみじかみて（一の水をかかり）

59 ななぬみじかみて（七の水をかかり）

60 かみんかみぎょらく（きれいにかかり）

61 とりんとりぎょらく（とるのもきれいに）

（Ⅲ）結末部

62 やうちうちもどて（家に帰り）

63 いしをなりたまをなり（尊いウナリ）

64 かわさげくにんぎ（九年木の）

65 いちぬゆだばをりうさげて（一の枝を折ってささげ）

66 ななぬゆだばをりうさげて（七の枝を折ってささげ）

67 なしやるうやすだしうや（生みの親、育ての親）

68 いしきよでたまきよでひきよせて（親しい兄弟を引き寄せて）

69 きゅぬよかろび（今日の良き日）

70 きゅぬまさるび（今日の勝る日）

71 なげやさくあをされて（なげやさくを合わされて）

72 ちまやさくあをされて（ちまやさくを合わされて）

73 かしらしじあをされて（かしらしじを合わされて）

74 こそでふそでばふりかけて（小袖大袖を振って）

75 あがれうちむかて（東に打ち向って）

76 はえぎょらさ（きれいにはえた）

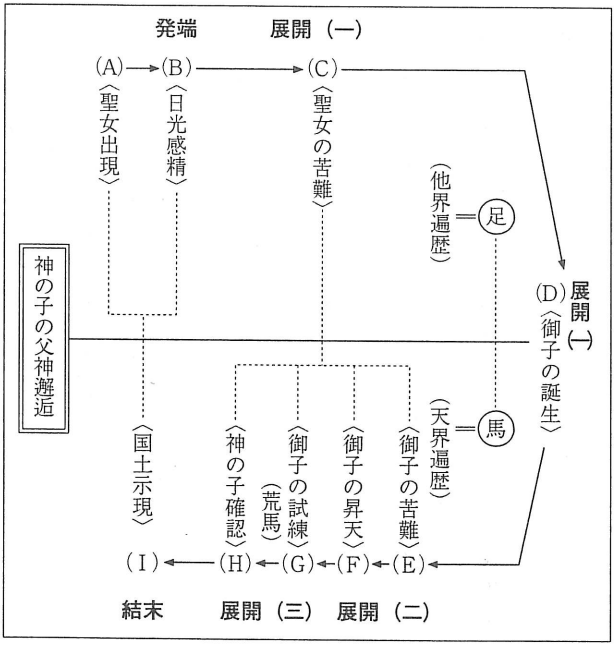
77 さかきばなとりまわし（榊を取り廻し）

78　あがれまてだうがんたてて（東のお日様を拝み）
79　てぃんぬわりだし（天の申し子）
80　あわれてぃんざし（尊い天ざし）
81　よいほぞん（良いほぞん）
82　かみとぅとう（神尊尊）
83　きみとぅとう（君尊尊）

（求哲次氏『奄美郷土研究会報』九号）[36]

まず(I)の発端部は、今日の吉日に神を呼び寄せ神祭りを営むさまを述べる。注目すべきは、次の(II)の展開部で、これはしばしば「思い松金」の(F)〔御子の昇天〕の叙述表現にも引用される。「天から下って来た尊い馬は真白毛の若三歳、金の鞍を打ちかけ、前後の腹帯を締め左右の鎧を垂れ、鞍の前後には日・月の型をとり、その左右にはまひさ型・蝶型をとる」（32～42）。これはまさに新ユタが聖なる白馬に乗り込むさまを讃美して述べるもの。「轡をはめ手綱を引き馬引きの小太郎によって、私の日の神が打ち乗られ、美しい馬場の広道を蹄の音も高く降りてゆく」（43～50）。小太郎なる馬引きに引かれた聖なる馬に乗るのは、勿論新ユタ自身であるが、それは日の神そのものが打ち乗られた意義をもっている。「海の美しい波をかぶり、美しいショージゴに降り、美しい水を幾度も浴びる」（51～61）。新ユタは馬に導かれてまず海浜の聖地にて聖なる水をかぶり、さらに導かれて山中の聖地なるショージゴ（精進川）に至り、聖水を浴びる。そしてこの折に、この呪詞「マレガタレ」が唱えられるのであるが、元来、ここにおいて新しいユタは誕生したと観念されていたようである。最後の(III)結末部は、家に帰り、ウナリ神を拝み、親・兄弟を呼び寄せての日の神祭りの営みを述べる。

右のような奄美ユタの成巫儀礼と対応し、巫業の祈祷のなかで、唱誦される巫祖神話「思い松金」のターベは、およそ次のごとき叙述構造と図式できるであろう。



それは、神の嫁なる聖女の苦難・遍歴と巫祖神として国土に示現する神の子の苦難・遍歴を「御子の誕生」を折り返し点として、反復の双分構造をもつものと判じられる。そして聖なる馬を乗りこなして「神の子」なるを確認されるモチーフを含んで「神の子の父神邂逅」を主題としており、【前・田村物語】の叙述構造にきわめて近似して、その原型的伝承と観じられる。またこれによれば、【後・田村物語】は、「神の子の父神邂逅」を「神の子の夫妻再会」に変容した二次的展開と推されるのである。

おわりに

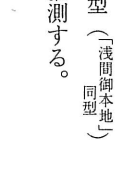
わたしは、別稿「児持山縁起の源流(二)―日光感精譚と児持山縁起―」[37]において、中世神話とも観じられる本地物語群のなかに、奄美ユタの唱誦するターベ「思い松金」なる神の子邂逅型日光感精神話の流れを汲むもののあることを提示している。すなわちそれは、(一)『七夕の本地』第二類本、(二)『浅間御本地御由来記』、(三)『神道集』〈児持山之事〉、(四)『明石物語』などである。が、次頁に示した対照表が、それぞれの継承、変容のモチーフ構成である。(A)'は(A)、(H)'は(H)、(あ)'はあ)、(お)'はお)に準ずる変容を示し、(あ)～(か)は物語・説話の文芸的脚色とみるものである。

まず(一)『七夕の本地』は、〈父子邂逅〉を主題としており、ターベ「思い松金」に準ずるものと言える。が、その叙述には聖馬のモチーフを欠いており、物語的展開の巾は相当に大きい。しかしながら、七夕星示現のモチーフは、「馬の家」物語とは深くかかわるもので、それについては改めて論じることとしたい。(二)『浅間御本地』は、神の子を姫君として〈父子邂逅〉のモチーフを退け、〈夫妻再会〉〈母子再会〉の複合的主題を含んでいる。(三)神道集「児持山之事」は、〈父子邂逅〉のモチーフを後退させて〈夫妻再会〉を主題としていると言える。(四)『明石物語』も〈夫妻再会〉を主題としているのみならず、主人公の神明示現のモチーフを欠いて、物語としての性格を強めている。が、それでも神の子邂逅型日光感精神話の物語的展開であることは疑えまい。

ところで、金賛会氏は、右のわたくしの論を受け、韓国の巫覡(ムーダン・シンバン)の唱誦する「帝釈本解」をとりあげ、ターベ「思い松金」および、右の物語群との比較を試みている。[38] そのなかで金氏は、その「帝釈本解」の諸伝承を次のタイプに分別している。

A_1型〈父子邂逅〉単純型（「思い松金」「七夕の本地」同型）
A_2型〈夫妻再会・父子邂逅〉複合型
B_1型〈夫妻再会〉単純型（「児持山之事」「明石物語」同型）
B_2型〈夫妻再会・母子再会〉複合型（「浅間御本地」同型）

そしてその展開の過程を次のごとく推測する。



これによれば、説経「小栗判官」は、A_2型に準じていることになり、「田村物語」はA_1型＋B_1型、つまり【前・田村物語】

構成	発端		展開										結末	
ターベ「思い松金」のモチーフ		(A)日光感精				(B)母親の苦難	(C)御子の誕生	(D)御子の苦難		(E)御子の昇天	(F)御子の試練	(G)御子の確認		(H)国土示現
物語・説話群モチーフ	(あ)国王・国司の恋慕	(A)月光感精	(い)求婚の拒絶	(う)聟君の流刑	(え)姫君急死の擬装	(B)姫君の流浪	(C)御子の誕生	(D)母子の流浪	(お)聟君救出	(E)夫妻・親子再会	(F)聟君の試練	(G)親子の確認	(か)恋慕者の遁世	(H)国土示現
上に準ずるモチーフ	(あ)'国司の横恋慕	(A)'申し子・結婚							(お)'姫子救出					(H)'主人公の栄華
(一)『七夕の本地』	(あ)	(A)	(い)		(え)	(B)→ ←(え)	(C)	(D)		(E)			(か)	(H)
(二)『浅間御本地』	(あ)	(A)	(い)		(え)	(B)	(C)	(D)	(お)'	(E)		(G)	(か)	(H)
(三)神道集「児持山之事」	(あ)' ←(A)'→		(い)	(う)	(え)	(B)	(C)	(D)	(お)	(E)				(H)
(四)『明石の物語』	(あ)' ←(A)'→		(い)	(う)	(え)	(B)	(C)	(D)	(お)	(E) (F)			(か)	(H)'

がA[1]型、【後・田村物語】がB[1]型に属することになるであろう。

なお「馬の家」物語の社会的背景やこれを育成した「馬の家」に属する巫覡集団については、別稿を期することとしたい。

注

(1) 明治四十三年十月、大槻文彦氏の招きで、赤井沢龍之市師が上京、同氏私邸、及び上野音楽学校で数曲を上演している（仙台叢書『伊達秘鑑』〔下巻〕昭4・所収、高野班山氏ほか「奥浄瑠璃合評」、小倉進平氏「御国浄瑠璃」など）。

(2) 本田安次氏監修『日本民俗音楽』第九巻（ビクター・昭8・NHK収録）に石垣勇英師・鈴木幸竜師の語り、伊達孝氏編『日本音楽史』（コロンビア・昭9発売）に石垣勇英師の語りを収めている。

(3) 高橋秀雄氏「奥浄瑠璃は生きていた」（『民俗芸能』第四号、昭38・3）

(4) 昭和三十七年に高橋秀雄氏の仲介で上京して、その語りを録音しており、昭和四十一年十月に開催された第四回古典音楽鑑賞会に、その語りを披露されている。なお、同師は、岩手県平泉毛越寺坊中の生まれで、晩年は盲僧・盲女の宗教法人・大和宗の財務部長をつとめており、その姿が赤羽敬夫氏制作のビディオ「旭巫女縁起」（遊行舎・平8）に収められている。昭和五四年（一九七九）歿。

(5) 右掲注(1)の小倉進平氏「御国浄瑠璃」など参照

(6) 無一文館書店、昭7

(7) 斎藤報恩会、昭14

(8) 「奥浄瑠璃(1)」（『民俗芸能』第三十五号、昭41・1）「奥浄瑠璃(2)」（同三十六号、昭44・4）ほか。

(9) 『語り物・風流(二)』（木耳社、昭45）所収「語り物」七〈奥羽の語り物〉(三)「奥浄瑠璃・早物語」など。なおこれは、同氏が昭和の初年に収集されたもの。

(10) 「十和田本地について」（盛岡短大研究報告第六号、昭33・9）、「資料『桂清水本地』」（同報告第十一号、昭36・2）ほか。

(11) 「宮城教育大学付属図書館蔵・仙台浄瑠璃―解題と翻刻（その一）」（「宮城教育大学紀要、第十六巻、昭56）。なおこれは「仙台浄瑠璃―解題と翻刻（その八）」（同紀要、第二十三巻、平1）に及ぶ。

(12) 「奥浄瑠璃本『家条之本地』―解題と報告―」（「国語教育」昭50・3）「奥浄瑠璃本『西ノ宮一代記』と鵜鳥・黒森神楽『浦島太郎』」（同・昭55・3）ほか多数。最近のものとしては、「奥浄瑠璃『結城合戦』―解題と翻刻―」（『酢川滔々』第九号、平12・2）など。

(13) 『奥浄瑠璃集―翻刻と解題―』（和泉書院、平6）

(14) 五来重氏〈庶民生活史料集成〉第十七巻『民間芸能』（三一書房・昭47）「古浄瑠璃」、青森県史編纂民俗部会編『青森県史』〔民俗編〕（青森県、平13）資料南部第Ⅲ部・3

〈奥浄瑠璃本〉ほか。

(15) 桜井書店刊。第三篇「仙台浄瑠璃の研究」〈仙台古浄瑠璃と古浄瑠璃〉において、奥浄瑠璃の伝本を第一類・古浄瑠璃中心の曲、第二類・判官物及び関係曲、第三類・奥浄瑠璃の地方的特有曲、第四類・近松その他、に分類されている。

(16) 第四十一巻・第九号（昭39・9）。その分類は、右掲注(15)の若月案に拠っている。

(17) 第三十二巻・第五号（平2・5）。これでは、①〈本地物〉、②〈判官物〉、③〈東北地方の題材によって創作された特殊曲〉、④〈古浄瑠璃系その他〉に分別。

(18) 平成二年五月十日、於東北大学、論題「奥浄瑠璃の台本」

(19) 平成二年十一月十七日、於平戸市離島開発センター、論題「奥浄瑠璃の行方」

(20) Ⅰ・説経節系〔神仏物〕(一)本地物(二)霊験物、Ⅱ・古浄瑠璃系〔時代物〕(一)奥州物(二)判官物(三)源平物、Ⅲ・新浄瑠璃系〔世話物〕(一)御家騒動物（二）仇討物、Ⅳ・祝言系(一)滑稽物(二)早物語の四分類九項目に分別。

(21) 福田晃・神田洋・真下美弥子共編、三弥井書店。

(22) 天明六年二月二十一日の条。

(23) 右掲注（1）にあげた赤井沢竜之市師もこれを演じており、注（2）にあげた石垣勇英師も鈴木幸竜師も、これを好んで語っている。

(24) 右掲注（6）にあげた高橋秀雄氏の「奥浄瑠璃(1)」には「田村三代記」の初段・二段が紹介されているが、これは北峰師の筆録を元としている。

(25) 近刊『奥浄瑠璃集成(一)』に収載予定。

(26) 「盛岡南部藩の『田村語り』」（『岩手県立博物館研究報告』二十号、平5）

(27) 柳亭種彦の『用捨箱』に、文化年中の頃まで盛んに江戸の古浄瑠璃の版本が、奥州・仙台方面に届けられていたことを記している。また阿部幹夫氏の「南部・伊達両藩の古浄瑠璃―古浄瑠璃「熊谷先陣問答」定着の軌跡―」（溝座・日本の伝承文学・7『在地伝承の世界』〔東日本〕三弥井書店、平11）によると、寛文から元禄にかけて、南部・伊達の藩中に江戸方面からの操りや古浄瑠璃太夫の上演が盛んにおこなわれており、その演目が在地の座頭たちの「奥浄瑠璃」として継承されていたとのことである。他方、伊達藩の仙台国分町には「いせや半右衛門」などの版元のあったことが、阿部氏蔵の浄瑠璃版本『古戦場鐘懸の松』（ひらがな六段）などで知られる。それならば、仙台版元が独自に制作した奥浄瑠璃正本の存在も考えられるであろう。

(28) 「立烏帽子考」（『民族』三巻二号・昭3・1、『定本柳田国男集』第十二巻、筑摩書房、昭38、所収）など。

(29) 『我が国民間信仰史の研究』（一）（創元社、昭30）第九篇「武将の遊行伝説と民間信仰―坂上田村麻呂伝説攷―」

(30) 拙稿「馬の家物語の系譜―〈田村語り〉をめぐって―(上)」(『立命館文学』第四八五～四八六号、昭60・11)

(31) 折口信夫氏の「小栗判官論の計画―『餓鬼阿弥蘇生譚』終篇―」(折口信夫全集、第二巻『古代研究(民俗学篇2)』(中央公論、昭30)には、メモ風に「馬の家としての常陸小栗氏。馬の神としての神明(観音)。その巫女。小栗の孫。小栗家の先祖の物語を語る宣命……」と、小栗照手譚が「馬の家」物語であり、その馬の神にかかわる巫覡の徒によって育成されたものと推している。それについては、わたくしも「小栗照手譚の生成」(『国学院雑誌』六十六巻十一号、昭40・11)、「小栗」語りの発生―馬の家の物語をめぐって―(上)(中)(下)(『日本文学』二十二巻十一号、二十三巻四号・五号、昭48・11、昭49・4、同5、『中世語り物文芸―その系譜と展開―』三弥井書店、昭56、所収)において論究している。

(32) 「鬼鹿毛とその騎士―小栗判官論への道程―」(『日本文学』二一巻三号、昭47・3)

(33) 「田村伝説と説経『小栗判官』」(『国語と国文学』五十二巻九号、昭50・9)

(34) 「奄美におけるユタについて―その予備的考察―」(『民俗研究』昭39・2、『奄美のシャーマニズム』弘文堂、昭52・所収)など。

(35) 角川書店、昭52

(36) 本資料は、故文英吉氏が昭和二十七年二月二十二日に名瀬市の某ユタから採集されたもので、そのノートを求哲次氏が整理して発表されたものである。

(37) 「論究日本文学」四十五号、昭57・5(拙著『神道集説話の成立』三弥井書店、昭59・所収

(38) 「本解『帝釈クッ』と本地物語『浅間の本地』・神道集『児持山之事』」(『立命館文学』五四一号・五四四号、平7・9、『本地物語の比較研究―日本と韓国の比較から―』三弥井書店、平13、所収)

(ふくだ・あきら/立命館大学)